



大隅諸島種子島から得られた標本に基づく南西諸島初記録のスズキ

中村潤平¹・松浦圭太²・向井千晴³・本村浩之⁴

Author & Article Info

¹ いおワールドかごしま水族館（鹿児島市）
j-nakamura@ioworld.jp (corresponding author)
² （千葉市）
³ （熊毛郡南種子町）
⁴ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

Received 19 November 2022
Revised 24 November 2022
Accepted 24 November 2022
Published 29 November 2022
DOI 10.34583/ichthy.26.0_34

Jumpei Nakamura, Keita Matsuura, Chiharu Mukai and Hiroyuki Motomura. 2022. The Japanese Seabass *Lateolabrax japonicus* (Lateolabracidae) from Tanega-shima island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, Japan: first specimen-based record from the Nansei Islands. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 26: 34–37.

Abstract

A single specimen of the Japanese Seabass *Lateolabrax japonicus* (Cuvier, 1828) was collected from Tanega-shima island, Osumi Islands, Nansei Islands, Japan. In Japanese waters, although *L. japonicus* is widely distributed in the Japanese mainland, the species has at no time been recorded from the Nansei Islands on the basis of voucher specimens. Thus, the present specimen represents the first specimen-based record of *L. japonicus* from the Nansei Islands and the southernmost record for the species.

スズキ科スズキ属 (Lateolabracidae; *Lateolabrax*) のスズキ *Lateolabrax japonicus* (Cuvier, 1828) は、ロシアの沿海地方、樺太島、日本、および朝鮮半島南部に分布し、日本国内においては北海道から九州にかけて広く分布する（波戸岡, 2013; Dyldin and Orlov, 2017）。本種は沿岸域や河川などの多様な環境に生息する水産重要種であり、遊漁の対象としても人気が高い（河村, 1989; 中山, 2018）。スズキは分布域の南限にあたる鹿児島県において、県本土各地で写真や標本に基づき記録されているが（鹿児島島の自然を記録する会, 2002; 高尾野川をきれいにする会, 2016; 松沼, 2016; ジョン, 2017; 畑, 2018, 2020; 公益財団法人鹿児島市水族館公社, 2018; 中村, 2020; 中川ほか, 2021; 上城, 2022）、南西諸島における本種の記録は種子島を分布

域に含めた文献（鹿児島島の自然を記録する会, 2002; 米沢, 2003; 吉郷, 2014）に限られ、これまで写真や標本に基づく南西諸島からの本種の確実な記録は知られていなかった。

2021年5月に第1–3著者らの種子島におけるスズキ科魚類の調査によって、同島西岸で1個体のスズキが釣獲された。本標本は標本に基づくスズキの南西諸島初記録および分布南限記録となるため、ここに報告する。また、これまでの調査によって得られた情報を基に種子島でのスズキの生息状況についての考察をおこなった。

材料と方法

計数・計測方法は村瀬ほか（2012）にしたがった。標準体長は体長または SL と表記し、体各部の計測はノギスを用いて 0.1 mm までおこなった。生鮮時の体色の記載は、固定前に撮影されたカラー写真（Fig. 1A）に基づく。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村（2009）に準拠した。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館（KAUM）に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。なお、本稿ではタイリクスズキに適用する学名を中山（2018）と本村（2020）にしたがい *Lateolabrax* sp. とした。

Lateolabrax japonicus (Cuvier, 1828)

スズキ

(Figs. 1, 2; Table 1)

標本 KAUM-I. 157130, 体長 283.5 mm, 大隅諸島種子島西岸（鹿児島県熊毛郡南種子町坂井; 30°27'N, 130°57'E）、水深約 5 m 地点の表層、釣り、2021年5月23日、中村潤平。

記載 計数値と体各部の体長に対する割合（%）は Table 1 に示した。体は前後方向に細長く、側扁する。体高は低く、腹鰭起部で最大。体背縁は吻端から背鰭第5棘起部にかけて上昇し、そこから尾柄部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は下顎先端から腹鰭起部にかけて下降し、



Fig. 1. Photographs of *Lateolabrax japonicus* from Tanega-shima island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, Japan (KAUM-I. 157130, 283.5 mm standard length; A: fresh specimen; B: immediately after angling).

そこから臀鰭起部にかけては体軸と概ね並行、その後、臀鰭起部から尾柄部にかけて上昇する。尾柄は細く長い。口は端位で口裂は大きく、下顎先端は吻端より前方に位置する。上顎後端は眼の中央直下より後方に位置する。眼と瞳孔は正円形。鼻孔は2対で近接し、眼の前縁の前方に位置する。前鼻孔は背腹方向に長い楕円形で後縁に皮弁を有し、後鼻孔は正円形。前鰓蓋骨の後縁は鋸歯状で、隅角部から下縁にかけて6本の小棘を有する。主鰓蓋骨の後端に大きな棘、その上方に小さな棘を有する。頭部、体側、および各鰭の基底部は櫛鱗に覆われる。下顎腹面に鱗列があるが、明瞭な範囲は後半部の僅かな部分のみに限られ、前半部は痕跡的。側線は1本で、鰓蓋上方から尾柄部にかけての体側に位置する。肛門は臀鰭起部直前に位置する。背鰭起部は鰓蓋後端よりも後方、背鰭基底後端は臀鰭基底後端より前方にそれぞれ位置する。背鰭棘は第1棘から第5棘に向かって徐々に長くなり、第5棘から第12棘にかけて徐々に短くなる。背鰭第13棘は第12棘より長い。胸鰭基底上端は鰓蓋後端より前方、下端は鰓蓋後端直下付近にそ

れぞれ位置する。胸鰭後端は背鰭第9棘起部直下付近に位置する。腹鰭起部は胸鰭基底後端より後方に位置する。たんだ腹鰭の後端は背鰭第11棘起部直下付近に位置する。臀鰭起部は背鰭第7軟条起部直下付近に位置する。尾鰭は後縁の切れ込みが深い截形。両顎には細かい円錐歯が密に並ぶ。鰓耙は棒状で細長い。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1A) — 頭部と体側は光沢のある銀白色で、背面は色味が強く暗緑色がかかり、腹面は白色がかかる。瞳孔は黒色で、虹彩は黒褐色。背鰭棘は灰色で、棘間の鰭膜と背鰭軟条部は暗青色。背鰭の棘部と軟条部前半に黒色点が散在する。胸鰭は灰色。腹鰭、臀鰭、および尾鰭は暗青色。

分布 ロシアの沿海地方、樺太島、日本、および朝鮮半島南部に分布する (波戸岡, 2013; Dyldin and Orlov, 2017)。なお、従来の台湾や中国の大陸部沿岸における *Lateolabrax japonicus* の記録はタイリクスズキ *Lateolabrax* sp. である (Yokogawa, 2013; Kottelat, 2013)。国内においては北海道、本州、四国、および九州の沿岸域から記録され

ており（波戸岡，2013；松沼，2016；中山，2018），本研究によって南西諸島（大隅諸島種子島）における生息も確認された。

備考 本標本は背鰭軟条数が 13，吻がやや長く，吻長が体長の 8.9%，下顎腹面前部の鱗列が痕跡的，尾柄が細長く，尾柄高が体長の 10.4%，および体に明瞭な黒斑がないことなどの特徴が村瀬ほか（2012），波戸岡（2013），および Yokogawa（2019）が示したスズキ *Lateolabrax japonicus*

の標徴と一致したため本種に同定された。

スズキの南西諸島における記録は，本種の鹿児島県内での分布域を「県本土から種子島にかけての沿岸域に広く分布する」とした鹿児島県の自然を記録する会（2002），2003 年版鹿児島県レッドデータブック内の本種の項で「種子島が分布南限」と記述した米沢（2003），および 2003 年版鹿児島県レッドデータブックを引用して本種の分布域に種子島を含めた吉郷（2014）に限られる．上記の 3 文献の種子島でのスズキの分布記録の根拠となった情報は，一般社団法人鹿児島環境技術協会の米沢俊彦氏が 1996 年頃に種子島北西部の甲女川河口で全長 50 cm 程の本種 5 個体を釣獲したことに基づいている（米沢俊彦氏，私信）．なお，それらの標本や写真は残されておらず，その後の同氏による種子島での生物調査においてスズキは採集されていない（米沢俊彦氏，私信）．また，Kamohara（1957）は奄美大島からスズキを報告しているが，この記録はスズキではなく同属のヒラスズキ *Lateolabrax latus* Katayama, 1957 である可能性が高いとされているため（下瀬ほか，2011；中村ほか，2021），本研究では当該文献を南西諸島からのスズキの記録として扱わなかった．これらのことから南西諸島におけるスズキの写真や標本に基づく確実な記録は知られておらず，本研究での記載標本は標本に基づくスズキの南西諸島初記録および分布南限記録となる．

本研究における記載標本は，種子島南西部の小規模河川が流入する港湾内で夜間に釣りによって採集された（Fig. 1B）．なお，2021 年 5 月 23 日から 25 日の調査期間中，種子島内のスズキが生息している可能性が高い場所で釣りによる採集をおこなったが，ヒラスズキはスズキの採集地点や河川で多数釣獲されたものの，スズキは前述の 1 個体のみの確認であった．また，著者らによるこれまでの種子島におけるスズキ科魚類の分布状況の調査において，第 2 著者は 2016 年 9 月 26 日に種子島南岸の小規模河川の河口域で全長 25 cm 程度スズキを釣獲した（Fig. 2）．さらに，第 3 著者は長年種子島に出現する魚類の観察をおこなっており，過去 5 年程の間に同島の河川内のマングローブ域や河口域で様々な体サイズ（全長 30 cm 未満から全長 60 cm 程度）のスズキの出現を 10 個体前後確認している．これらのことから，種子島においてスズキは一定数生息しているものの個体群の規模は極めて小さい，もしくは他の海域からの偶発的な出現を繰り返していると考えられ，再生産の有無を含めた詳細な生息状況については本種の生活史を考慮した更なる調査が必要である．また，これまでの種子島内におけるスズキの出現記録を検討したところ，河川や河川の影響を受ける港湾でのみ確認されているため，同島内でスズキは河川環境に依存している可能性が考えられる．

Table 1. Counts and measurements of *Lateolabrax japonicus* from Tanega-shima island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, Japan.

	KAUM-I. 157130
Standard length (mm; SL)	283.5
Counts	
Dorsal-fin rays	XIII, 13
Anal-fin rays	III, 9
Pectoral-fin rays	17
Scales above lateral line	15
Scales below lateral line	17
Pored scales on lateral line	71
Measurements (% of SL)	
Total length	125.2
Fork length	121.7
Body depth at pelvic-fin origin	27.2
Body depth at anal-fin origin	22.4
Head length	32.8
Snout length	8.9
Orbit diameter	5.9
Interorbital width	6.3
Upper-jaw length	14.6
Postorbital length	19.5
Pre-pectoral-fin length	31.3
Pre-pelvic-fin length	37.2
Pre-dorsal-fin length	36.8
Pre-anal-fin length	71.3
Pre-anus length	66.2
Distance from anus to anal-fin origin	3.7
Length of dorsal-fin base	47.1
Length of spinous dorsal-fin base	29.6
Length of soft-rayed dorsal-fin base	18.4
Length of anal-fin base	12.8
1st dorsal-fin spine length	3.5
2nd dorsal-fin spine length	6.5
3rd dorsal-fin spine length	10.6
4th dorsal-fin spine length	15.7
5th dorsal-fin spine length	17.7
Penultimate dorsal-fin spine length	4.1
Last dorsal-fin spine length	7.5
Longest dorsal-fin soft ray length	13.8
Last dorsal-fin soft ray length	6.6
1st anal-fin spine length	3.3
2nd anal-fin spine length	15.0
3rd anal-fin spine length	14.3
Longest anal-fin soft ray length	14.7
Last anal-fin soft ray length	5.1
Pectoral-fin length	19.4
Pelvic-fin spine length	13.7
Pelvic-fin length	19.0
Caudal-peduncle length	18.6
Caudal-peduncle depth	10.4



Fig. 2. *Lateolabrax japonicus* from Tanega-shima island, caught at the mouth of a small river located on the south coast of the island (c.a. 25 cm total length, specimen not retained). Photo by K. Matsuura.

謝 辞

本稿執筆に際し、一般社団法人鹿児島環境技術協会の米沢俊彦氏には種子島におけるスズキの分布記録についての情報を賜り、鹿児島大学大学院農林水産学研究科の是枝伶旺氏には文献の収集、鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室のみなさまと同博物館のボランティアのみなさまには標本の登録・管理にご協力いただいた。匿名査読者と Ichthy 編集委員の畑 晴陵博士には本稿に対して適切な助言をいただいた。上記の方々に深く感謝申し上げます。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651)、JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009)、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

Dyldin, Yu. V. and A. M. Orlov. 2017. Ichthyofauna of fresh and brackish waters of Sakhalin Island: An annotated list with taxonomic comments: 3. Gadidae—Cryptacanthodidae families. *Journal of Ichthyology*, 57: 53–88. [URL](#)

畑 晴陵. 2018. スズキ, p. 183. 小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之 (編) 黒潮あたる鹿児島県の海内之浦漁港に水揚げされる魚たち. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)

畑 晴陵. 2020. スズキ, p. 213. 小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之 (編) 大隅市場魚類図鑑. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)

波戸岡清峰. 2013. スズキ科, pp. 748, 1957–1958. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.

ジョン ビョル. 2017. スズキ科, pp. 110–111. 岩坪洗樹・本村浩之 (編) 火山を望む豊海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)

鹿児島島の自然を記録する会 (編). 2002. 川の生きもの図鑑 鹿児島の水辺から. 南方新社, 鹿児島. 386 pp.

Kamohara, T. 1957. List of fishes from Amami-Oshima and adjacent regions, Kagoshima Prefecture, Japan. *Reports of the Usa Marine Biological Station, Kochi University*, 4 (1): 1–65.

河村功一. 1989. スズキ *Lateolabrax japonicus*, p. 485. 川那部浩哉・水野信彦 (編) 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京.

Kottelat, M. 2013. The fishes of the inland waters of Southeast Asia: A catalogue and core bibliography of the fishes known to occur in freshwaters, mangroves and estuaries. *Raffles Bulletin of Zoology, Supplement*, 27: 1–663. [URL](#)

公益財団法人鹿児島市水族館公社. 2018. かごしま水族館が確認した 鹿児島島の定置網の魚たち. 増訂版. 公益財団法人鹿児島市水族館公社, 鹿児島. 335 pp.

松沼瑞樹. 2016. スズキ, p. 30. 松沼瑞樹・福井美乃・本村浩之 (編) 鹿児島市の川魚図鑑. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)

本村浩之 (編). 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)

本村浩之. 2020. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準名と学名. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 560 pp. [URL](#)

村瀬敦宣・宮崎佑介・瀬能 宏. 2012. 屋久島産標本に基づくヒラスズキ *Lateolabrax latus* の再記載と河川における生息状況. *魚類学雑誌*, 59: 11–20. [URL](#)

中川龍一・樋之口蓉子・Kunto Wibowo・ジョン ビョル・和田英敏・藤原恭司・荒木萌里・望月健太郎・飯野友香・石原祥太郎・小川奈津・出羽優風・本村浩之. 2021. 鹿児島湾北部の霧島市小浜海岸の魚類相. *Nature of Kagoshima*, 47: 373–379. [URL](#)

中村潤平. 2020. スズキ, p. 70. 本村浩之・山本智子・田金秀一郎 (編) 鹿児島県北西部 不知火海にそぐ 高尾野川河口周辺の生きものたち. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)

中村潤平・大富 潤・本村浩之. 2021. 奄美群島喜界島から得られた標本に基づく琉球列島初記録のヒラスズキ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 14: 13–16. [URL](#)

中山耕至. 2018. スズキ科 Lateolabracidae, pp. 228–229. 中坊徹次 (編) 小学館の図鑑 Z 日本魚類館. 小学館, 東京.

下瀬 環・名波 敦・瀬能 宏. 2011. 石垣島で水中撮影されたスズキ属魚類. *魚類学雑誌*, 58: 211–213.

高尾野川をきれいにする会 (編). 2016. 2015 年改訂版 高尾野川のさかな図鑑. 高尾野川をきれいにする会, 出水. 20 pp.

上城拓也. 2022. スズキ科 Lateolabracidae, p. 89. 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之 (編) 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.

Yokogawa, K. 2013. Nomenclatural reassessment of the sea bass *Lateolabrax maculatus* (McClelland, 1844) (Percichthyidae) and a redescription of the species. *Biogeography*, 15: 21–32.

Yokogawa, K. 2019. Morphological differences between species of the sea bass genus *Lateolabrax* (Teleostei, Perciformes), with particular emphasis on growth-related changes. *ZooKeys*, 859: 69–115. [URL](#)

米沢俊彦. 2003. 分布特性上重要, pp. 154–158. 鹿児島県環境生活部環境保護課 (編) 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編 鹿児島県レッドデータブック. 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.

吉郷英範. 2014. 琉球列島産陸水性魚類相および文献目録. *Fauna Ryukyuna*, 9: 1–153. [URL](#)